

審査の結果の要旨

氏名 溝田 友里

本研究では、非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染が血友病患者の life にもたらした困難を明らかにするとともに、患者の life の再構築への支援への示唆を得ることを目的とした。HIV 感染血友病患者を対象に面接調査および質問紙調査を実施し、HIV 感染に関する認知をネガティブな認知とポジティブな認知の両面から検討するとともに、就労や社会活動、恋愛・結婚などの社会との関わりの現状とそれらもつ意味を検討したところ、以下の点が明らかになった。

1. 回答者は全体として、HIV 感染、HCV 感染、血友病という 3 重の疾患と薬の副作用に由来する多様な症状に日常的に悩まされており、病の不確実感と今後への不安が存在した。

2. 就労者の割合は 56.6% で、一般人口よりもはるかに低く、体調上の問題や HIV のスティグマが就労を妨げていることが明らかになった。有配偶率は 33.5% で、各年代を通して一般人口よりも低くなっていた。

3. 最近でも、回答者の 1 割が「自分の命はもう長くない、10 年と生きられない」と回答し、8.4% が「死んでしまいたい、死んでもいい」と「強く」感じており、「少し」感じると合わせると 35.7% にのぼった。

4. 「精神的に強くなった」、「1 日 1 日を過ごしていくこと大切に感じるようになった」、「家族との絆が強くなった」など、9 割の回答者が何らかの得たものがあったと感じていた。

5. HIV に関する受けとめである negative psychological state と perceived positive change は life の混乱や適応の指標と強く関連していた。30 歳代で negative psychological state が多く、perceived positive change が少ないという年代差がみとめられたが、身体健康、就労と社会参加の有無、intimate relationship への満足、生きがい投入することで、年代による有意差がなくなった。すなわち、年代よりも、就労と社会参加の有無や intimate relationship への満足、生きがいが、HIV 感染に関する認知により大きな影響を与える因子であることが示された。

6. HAART 導入に伴う予後の改善により、本調査回答者においても身体健康状態の改善がみられたが、psychological dysfunction や、就労率、婚姻率には改善がみられず、life の再構築の困難から、長く

生きられることを喜べない状況ある患者も存在した。

7. HIV 感染を知った当時、就職や intimate relationship の構築が発達課題であった、主に現在の 30 代を中心とする回答者において、それらの獲得の達成が妨げられており、そのことがその年代の精神健康状態の悪さやホープレベルの低さの一因として考えられた。

以上の結果から、HIV 感染者の予後の改善に伴い、新たな人生に適応していくためのより積極的な支援の必要性が示唆され、そのような支援として、就労支援や、恋愛、結婚、性生活に関して他の患者の経験を聞く機会を設けたり、人工授精を保険適用するなどの intimate relationship の構築を促進するような施策が必要であることが示唆された。本研究から得られた実践への示唆や方法論的示唆を、他の疾患をもつ患者やさまざまな逆境にある人の支援において適用していくことが期待される。

以上、本論文は、非加熱血液凝固因子製剤による HIV 感染血友病患者における、HIV 感染に関する患者のネガティブな認知とポジティブな認知を記述的に明らかにした。また、HIV 感染発生から約 20 年経過した患者のその後の人生において、就労や社会参加、他者との親密な関わりの構築など、社会との関わりを築くうえでの困難がもたらされていることを明らかにするとともに、それら社会との関わりをもつことが患者にとっても重要な意味を明らかにした。本研究は、これまで主に精神健康の悪化という部分的な側面でしか捉えられてこなかった、HIV 感染が血友病患者の life におよぼした影響を、さまざまな視点から包括的に理解することや、病いとともに生きる人々が新たな人生に適応していくための支援を考案するうえで重要な貢献を果たすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。